

## 論文審査の結果要旨

論文提出者氏名 加藤 有子

加藤有子氏の博士論文『場所を開く——ブルーノ・シュルツの絵画と小説』は、ポーランド作家ブルーノ・シュルツの作品を、彼が手がけた絵画と小説の両面から統合的に読み解こうとする野心的な労作である。

加藤氏は1910年代末の初期ドローイングから1930年代の二つの短編集『肉桂色の店』(1933)と『砂時計の下のサナトリウム』(1937)を対象に、作品／現実、イメージ／言葉という区分けを一貫して問い直すシュルツ作品の自己言及的な性格を取り出し、そこから作品というメディアにきわめて自覚的であった芸術家であり理論家である新しいシュルツ像を打ち出している。

論文は注、参考文献を含めて203頁にのぼり、48点の図版を参考資料として付す。

本論は3章からなり、第一章で絵画を、第三章で小説を扱う。両者を媒介する第二章が、絵画と文学のジャンルを横断するトポスとしての「書物」の分析に充てられる。

第一章では、まず初期ドローイングが画中画、額縁の表象、物語画の模倣、見る／見られる関係の視覚化によって、絵画の機制を前景化した「絵画についての絵画」であることが論じられる。画中画や画中画の額縁の拡大によって作品と現実の境界が流動化され、絵画を見るまなざしの存在があらわになるシュルツ絵画の自己言及的性質が明らかにされる。とりわけ絵のなかに描かれた額縁への着目は、のちに展開される「書物論」、「小説祖型論」のひな形ともなり、本論の主題を導く秀逸な導入となっている。

ついで、ガラス版画集『偶像賛美の書』(1920-22作成、1924連作化)とザッヘル＝マゾッホの小説『毛皮を着たヴィーナス』を扱い、『偶像賛美の書』をマゾッホの小説の視覚化として捉えた上で、世俗的な現代女性をヴィーナスの表象とすることによる記号作用の攪乱、神話祖型の現代的書き換えが両者の共通項として取り出される。同時にマゾッホとシュルツが作品に描かれた場面をみずから再演(represent)した経緯から、両者に共通する作品と現実の倒錯した表象関係が浮き彫りになる。ポルノグラフィ、あるいはアナクロニズムと揶揄されたシュルツの初期絵画が、実は伝統的絵画の解体であり、絵画的表象の根源を問うラディカルな営みであったことが解明される。

第二章では、シュルツが作った三つの「書物」、すなわちガラス版画集『偶像賛美の書』、自作挿絵入りの短編集『砂時計の下のサナトリウム』、小説のなかの〈書物〉を祖上に、シュルツがイメージとテキストに分断されない、両者を包摂する「書物」を目指していたことが考察される。

『偶像賛美の書』はガラス版画というイメージから成る「書」であり、「刻む」行為によって原版が得られる一種の版画であるが、加藤氏はこの両面性のなかにこそシュルツが求めた書物という「トポス」の回復を読み込む。複製可能な版画『偶像賛美の書』は収録作品をセットごとに変え、異なる表紙を付された可変の「書」であり、それぞれがオリジナルでありコピーでもあるが、この複層的なあり方こそシュルツの物語観・書物観を貫くものであった。

『砂時計の下のサナトリウム』の初版本の挿絵分析では、たんなる本文の説明ではないシュル

ツの挿絵とテキストの関係に新たな光が当てられ、ここから挿絵とテキストが相互に交響し、新たな意味が生成される場としての書物のあり方が浮かび上がる。同時にこの章では、二つの短編集の大胆な読み直しによって、シュルツの短編がユダヤの伝統であるタルムードにおける「注釈（ゲラマー）」をなぞっていることが示唆され、第三章のテーマへと接続される。

第三章では、シュルツの小説を支える基本的世界把握が、トーマス・マンの『ヨセフとその兄弟』から抽出した祖型の反復という物語／歴史観、そしてゲーテの形態学に通じるメタモルフォーゼと原型論に遡って論じられる。「祖型と反復」という概念は、第一章で取り出された「自己言及性」と呼応しながら、シュルツ作品のもう一つの特徴、先行するさまざまな作家の作品と交響する新たな物語空間という次元を明らかにする。これによって、従来作家の影響関係と処理されてきた類似のモチーフも、シュルツの文学的営みの必然の結果であったことが明らかになる。

加藤氏はシュルツのもう一つの大きな特徴である変形や変身のモチーフについても、ゲーテの形態論を援用しながら、シュルツの世界把握の変化を跡づける。ゲーテにとって形態学とは距離をおいて対象を外から観察するのではなく、対象の内部に入り込み、内部から対象を把握することにほかならなかったが、シュルツの第二短編集の語り手ユーゼフも同じ道程をたどって変化する。加藤氏は画家でもあるこの語り手の変化をゲーテのいうメタモルフォーゼになぞらえながら、「見る」ことから「手による制作」への変化であると、「足」や「ハイヒール」に特化されがちなシュルツのテーマを変奏させてこの論文を締めくくる。

わが国には世界にも例のない工藤幸雄氏の全作品翻訳という仕事があるものの、シュルツの名が浸透しているとは言えず、欧米諸国では作品が高く評価され多くの研究があるとは言え、もっぱら小説の分析に集中し、画家と作家シュルツを統合的に論じる視点はなかった。本論文はそこに一貫する制作原理を読み込み、内容に偏りがちだったシュルツ理解を大胆に書きかえる。

論証の手続きは大胆かつ緻密、また初出文献に丹念にあたる行き届いた調査、広汎な資料的裏付けなど、本論文は実証研究としても高く評価される。そればかりか、本論に導入された「書物」という魅力的な視点をはじめ、蝶番のように絵画論と小説論を媒介する「書物論」を中央に配する巧みな構成、明快で説得力のある文章、いずれを取っても出色の論文となっている。

また西洋絵画史への細かな目配りや、「祖型と反復」という概念を手がかりに、シュルツ作品をゲーテからマゾッホ、トーマス・マン、クービンなど幅広い文学的コンテクストに位置づける遠大な視座は、国際的に見ても遜色ないレベルにこの論文を押し上げている。

審査委員からは、理知的に整理されている分シュルツの豊かさを取り逃がしているくらいがある、論旨が明快であるだけに個々の分析にやや不満が残る、あるいは作品のなかでの父・子の分析や、ユダヤ思想に照らしたシュルツ作品の時間や歴史にたいする考え方への踏み込みが希薄であるといった問題点が指摘されたが、これらの指摘は本論文への高い評価に基づくコメントであり、むしろ今後の加藤氏の研究の広がりや可能性を示唆するものだと言える。

以上により、本審査委員会は本論文を博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。